

令和3年度 教育実践優秀教員の取組の中から

I 栄養教諭と中心とした、チームで取り組む食育推進について ～ 今後につなげる、コロナ禍での食育の推進 ～

本校では持続可能な社会の担い手の育成を目標として、教育活動に取り組んでいる。コロナ禍の中、子どもたちが心身ともに健康であるために、「食育」がこれまで以上に重要と考えた。新たな日常の中で、栄養教諭を中心に、学校内外で連携して、「今だからできる」食育の推進に取り組んだ。

1 実践の具体 今回は、特に重点的に取り組んだ以下の内容について、発表します。

① 児童主体の、学校全体の課題解決に向けた食品ロスを減らす取組

昨年度の臨時休業明けに、児童の活動量や食欲が低下し、感染対策のために配膳方法が変更になったことなどから、毎日、大量の給食の残菜が出るようになった。給食委員会の児童を中心に、児童一人一人が自分の食べ方を見直すよう呼びかけ、残菜を減らすことができるようにチームで取り組んだ。

② 家庭と連携した食育推進の工夫・コロナ禍での食育の実践

臨時休業期間中に、本校の食の課題解決に向けた内容や、好評な給食レシピを学校HPに掲載し、家庭への情報発信を行った。学校再開後は、感染対策を講じつつ、児童の食の学びの場を保障できるよう、体験型の指導方法を工夫した。学校での学習後は、家庭と連携した実践を行った。

2 実践の成果と今後の方向性

栄養教諭が中心となって実態から課題を洗い出した上で、学校全体で食育の指導を行い、家庭と連携しながら取り組んだことで、「朝食を毎日摂っている児童」前年度 87%→2年度末 90%、「給食が好きな児童」93%→96%、「いつも元気な児童」66%→77%など、改善が見られた。また、児童主体で給食の残菜を減らす取組を行ったことで、残菜が大幅に減少し、一人一人が自分の食べ方を見直す機会となった。

今後は、実態に基づいた食育のPDCAサイクルの確立や、ICTの活用、児童主体の取組をさらに広げていくことなどが課題である。栄養教諭が中心となってチームで食育を推進し、今回得られた連携体制の在り方を、アフターコロナでも受け継いでいきたいと考えている。

II 教員を「つなぐ」人権・同和教育研修の実践について ～「本音で語り合い」生き生きと輝ける教員集団をめざして～

自他の人権を尊重するには、かけがえのない存在として、あるがままの自分を受け入れる自尊感情の育成は必須である。本校は反差別のなかまづくりを進めているが、教員の若年化が進むなか、教員の困り感がアンケートより見受けられた。生徒の背景を見つめ、自信をもって人権・同和教育を推進するにはどうすればよいか。学力・進路支援担当として取り組んだ、教員の「つながり」と「主体性」を大切にしたい教員研修を紹介する。

1 実践の具体

① 実態把握と研修計画

教員の困り感を把握し、理解度やニーズに合った研修となるよう、全教員対象理解度チェックを行い、研修テーマと実施時期の検討、年間計画の立案を行った。

② 自主研修「Human Rights Café」の実施

教員の校内人権教育アンケートの声を元に、若手中心の自主研修を始めた。少しでも気軽に参加できるように、つながりを大事にしながら「分からないこと」を「分からない」と言える雰囲気づくりを行った。

③ 現職教育全体会における人権・同和教育研修の工夫

ワークショップを取り入れ、教員が「主体性」をもって取り組めるようにした。その際、グループ分けを意図的に行うことで、学年間・世代間の交流を図ったり、地域や他校等の方と一緒に研修を行うことで人権意識の高揚を図ったり、「つながり」による学びを研修に取り入れた。

2 研修の検証

教員アンケートでは「生徒の背景をより意識するようになった」「ベテランの先生に遠慮なく相談できるようになった」などの声が多くなり、同時に課題であった生徒の自尊感情の低さも、右表のように改善されてきている。

全国学力・学習状況調査「自分にはよいことがあるか」肯定的回答

	本校	香川県比	全国比
2016年度	53.2	-9.6	-16.1
2021年度	75.6	+3.0	-0.6